『第二章』について　七

昭和五十六年十一月十四日　盛岡中央公民館

一、娑婆の世界を支える「在」が浄土なのだね

この娑婆の世界には、親があり、子があり、自分というものがあるのだが、それを支えている場所がないのだね、この世には。それを支える「在」が浄土なのだね。往生といってどこへ往くのか。それが浄土へ往く、そこが在なのだ。

西田先生が晩年に到達したところが、いわゆる「場所の論理」ですね。あれが最後にどうなったか、そこまではわからないけれども。

僕だけかもしれないのだ、浄土をすっかり忘れていた。気がついておりながら、ピンとこなかった。

とにかく自分の身体に対して場所、つまり浄土があるという、これをちゃんと押さえて読むと今までの読み方がすっかり違ってくる。普通救いというと世間の慈悲だけをつい考える。場所つまり浄土がなければ救いにならないのだ。これがなければ幽霊の救いになってしまう。つまり足がつかないわけだ。足がない、「在」がない、これでは救いにならない。　僕らは救いだとか、宗教、信仰などと言っているけれども、うっかりすると幽霊の救いになっているのではないかと思うのですね。

しかしこれでなんで幽霊なんかが必要なのかわかるね。われわれの精神生活のうえで幽霊というのは必要なのだ。われわれ自身半分くらいが幽霊的存在なのだ。

それにつけても思うのは、地獄である。浄土というのは言っているようだけれど、地獄というのはどうもはっきり出てないようだ。地獄というのはやっぱりこの世と浄土との中間のつまり幽霊の所在地というのか、幽霊の居るところが地獄である。地獄という存在はない、地獄という在はない。だからこの前申しましたように、無間地獄というのは、どこまで堕ちて行くもきりがない。どこまでも堕ちていくのがそれが無間地獄である。

浄土というのはこれ以上堕ちることのない最後のよりどころ、最後の安住のところでしょうか。地獄というそのものは積極的にはないので、どうも消極的にあるものらしい。

ただ念仏して往生をとげる、この往生の方に強い意味があるようだ。

二、救いはこの世にではなく、
浄土へ念仏往生せしめる大慈悲心にある

今日プリントを準備していただきましたが、『一枚起請文』です。

もろこし（唐）、我がちょう（朝）に、もろもろの智者達のさた（沙汰）し申さるる観念の念にも非ず。又、学文（問）をして念の心を悟りて申す念仏にも非ず。ただ、往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思とりて申す外には、別の子さい（細）候わず。但、三心四修と申す事の候うは、皆、決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思う内に籠り候う也。此外におくふかき事を存せば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。

念仏を信ぜん人は、たとい一代の法を能く能く学すとも、一文不知の愚どん（鈍）の身になして、尼入道の無ち（智）のともがらに同じくして、ちしゃ（智者）のふるまいをせずして、只一こう（向）に念仏すべし。

為証以両手印（証のために両手をもって印す）

浄土宗の安心起行、此一紙に至極せり。源空が所存、此外に全く別義を存せず。滅後の邪義をふせがんが為めに、所存を記し畢（おわんぬ）。

建暦二年正月二十三日

源空（花押）

プリントには注釈があるようですが、

法然は建暦二年正月二十五日に没したが、その二日まえ二十三日、弟子の勢観房がお願いした。

この勢観房というのは、『歎異抄』の後序に出ておりましたね。親鸞聖人と意見が違って。法然上人とわれわれとは信心が違うか別かなどというあの問題で。親鸞聖人は先生も弟子も信心においては一つだとこう言った。弟子の勢観房たちは、何でそんなことがるかと反対を唱えたと書いてあった。あの勢観房でしょう。

弟子の勢観房「念仏の安心、年来おしへにあづかると雖も、なお御自筆に肝要の御所存、一ふであそばされて給はれ」

とお願いしたとき、法然上人は前の年から病気が重くなって、もういよいよものを言うのがおっくうになって、ぼーっとして生きているという病状だったらしい。ところがいよいよ最期になってくると、かえってしっかりしておられたらしい。しかしもう何日も物を食べなかったと書いてありますね。そういうときに勢観房は「念仏の安心、年来おしへにあづかると雖も、なお御自筆に肝要の御所存、一ふであそばされて給はれ」と言った。なんだかこれ気の毒な感じもするね、弱っておられるお師匠さんに。言われた方もつらいでしょうね。

そこで書き与えらたのが、この『一枚起請文』です。

もろこし、我がちょうに、もろもろの智者達のさたし申さるる観念の念にも非ず。又、学文をして念の心を悟りて申す念仏に非ず。ただ、往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞと思とりて

南無阿弥陀仏と申してそれで救われるといきそうなものだが、救われるということはどういうことかというと、往生するということなのである。後に往生がついてこなければ救われるということにならない。

仏さまと自分との間にお慈悲、つまり感応道交して、親と子の心が一つになる。「お母さん」と言ったときに子

供の心と親の心が一つになって、それで子供は安心する。それで仏さまに救われると簡単に言う。けれどもそれは直接の端的な事実には違いないが、じつはそれだけではなかったのだね。

それがどうして決定できるかというと、その裏に往生というものがちゃんとある。つまり往く場所がある、親子が一緒に。

これ以上どこにも往きようがないという浄土そのものにぶつかっている。親と子の心が一つになった処が即ち浄土なのである。その浄土というのがあってはじめて安心していられるということが成り立つ。念仏を申すそのとき疑い無く往生するぞと。念仏だけではない、往生がすぐ裏についている。往生することがつまり念仏することなのである。そう言ってもいいでしょう。

疑なく往生するぞと思とりて申す外には、別の子細候わず。但、三心四修と申す事の候うは、皆、決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思う内に籠り候う也。

ここで三心四修についてプリントに注釈がありますね。「念仏者が必ず起こさなければならない心で、起行に対する安心である」と。

起行は念仏すること、身体の方では念仏すること。心の方ではこういう三つの心が必要なのだと、つまり安心である。至誠心、深心、回向発願心、これは救いが成り立つための心の経過しなければならない、必ず心の中にこういうことが起こるべきはずのものであると。

至誠心と深心、これは同じようなものでしょうね。至誠心で仏の心を信ずるそれが深心。そうして浄土に自身が入っていく回向発願心、仏になろうと願を発す。

皆決定して、決まって、漏れることなく、百パーセント「南無阿弥陀仏にて往生するぞと思う内に籠」っていると。これは南無阿弥陀仏という言葉の中に詰まっている。つまり簡単に言うと念仏の中に三心四修が詰まってしまっているのだと。

此外におくふかき事を存せば、

この外になお何か、法然上人だけが心の奥にこう別のことをちゃんと知っているのではないか、そんなことはない。

此外におくふかき事を存せば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。

これと同じ内容が『歎異抄』に出ているわけですね。

この「三心四修と申す事の」の三心四修は、それならばどこに成り立っているかというと、法蔵菩薩の修行の中にこれが入っているはずなのです。法蔵菩薩が五劫の間思惟した事の中に。

宇宙全体にあるあらゆる国々を一つ一つ調べてみて、その国の性格、国の中に何か汚れたものがないか、悪いことはないか、足りないことはないかと、いちいち一つ一つその国の中を徹底的に調べなおしてみた。いくらよい国でもその中に悪人が一人いる、親殺しが一人ある、あるいは病気にかかったものがいる、あるいは社会的なものじゃないけれど寒さが特にきついということがあれば、その国は清浄だとはいえない。つまり国全体としては、その中にただ一点の欠陥があれば、いくら小さくても一匹の悪いものがそこに入れば、それ全体が清浄だとは言えない。そういうようにいちいち詮索してみて、これ以上申し分ない、どこにも非の打ち所がないというのを選んだのが極楽であり、浄土だ。法蔵菩薩はわれわれを極楽に入れるために、完全無欠な場所をさがしてくれた。探すだけそれほど力があったわけである。それだけ修行したのである。

そういう修行はどういうものかというと、三心四修、そのほかにあらゆる善行、いわゆる聖道門的な修行をしたと。修行したあげく願を立てた。願を立ててから修行したのか、曽我先生は両方書いておられる。

普通には仏になるために、ずっとえらい修行をしたと書いてありますね。そして一番いい国を選んだ。

そこでこの前の問題です。法蔵菩薩がわれわれを救うために、ご自身が五劫の間思惟し、願を立て、いろいろな修行をしてくれた。そうして最後にわれわれを入れてくれる浄土というものを選んだ。ご自身がそういう自力の修行をうんとやっておいて浄土を選んだ。ところがわれわれには自力の修行はとてもできないから、何も修行

はしなくていい。念仏一つで来いと言われる。
それは有難いとうっかり思っていたけれども、なんだかおかしいような気がする。ご自身はさんざん自力修行をしておいて、そしてわれわれにはそのようなことはできないのだから、何もしなくていい、ただ念仏してくれと。
どうも何だかつじつまが合わないような感じがすると思っていたら、曽我先生も、ちょっとそういうように思うけれどもそれはそうではないのだとおっしゃっている。法蔵菩薩自身が本来それ以前からあった念仏の道におられると。自分自身がその念仏の道に立っておられた。そして仏になられた。
法蔵菩薩が世自在王如来の弟子になられたというのは、それ以前にずっと無量無数の仏があり、その仏の伝統の念仏の歴史の中に自分も生きて四十八願を起こされた。四十八願を起こすことによって念仏浄土をつくられた。だから念仏というのは四十八願以前にあった。その念仏の大道に法蔵菩薩がみずから生き、そのことを通して四十八願を立て、われわれ衆生にこの念仏で来い、こういうようにおっしゃってくれた。
だから法蔵菩薩が四十八願をお立てになる前に念仏があった。念仏があってから本願が出たのであって、念仏以前に本願が先にあったのではない。これは曽我先生だけではないだろうかな、そういうようにていねいに言われたのは。金子先生はどう言っておられるかな、どっかにこれに触れておられるところがあるのだろうと思うのだが。
法蔵菩薩のご修行、五劫思惟のなかには当然この三心四修は入っている。そういう入っているというその中から立てられた本願、その四十八の本願の中の第十八願が、念仏を称えればとこういう。

三心四修と申す事の候うは、皆、決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思う内に籠て候う也。

この中に三心四修がちゃんとこもってしまっている。われわれにあらためて三心四修をしろとおっしゃるのであれば、それは自力になってしまう。念仏のなかに一切の徳がこもっている、念仏一つでいいのだ。これをはっきり法然上人がおっしゃっている。それをそのまま親鸞聖人が受け取っておられる。

救いというのは、仏の慈悲がわれわれの心に通ったことである。親子にたとえると、親の心と子供の心が一つになることである。そこに一種の光があるのだ、その場所に光がある、暖かみがある。いわゆる歓喜がある。救いをこういうことだけについ思いとっていいつもりでずっと来たところが、最近になってなんだかこれだけでは落ち着きが悪い。

これを信心だと、仏から賜った信心である、自分の信心ではないと言ってみても、なにかこの信心が宙に浮いているような感じがする。もうひとつ落ち着かない。

どこにそういう問題があるかと思ったら、つまり生きるということは、われわれが有るのである。親が有り子が有る。自分というものが有る。有るのだが、この有るを支える在るを忘れている。

そういうと今まで気がつかなかったのであるが、この親と子の関係だけにお慈悲が救いが成り立つのでなしに、親子関係が成り立つ場所がなければならない。

これだけでは半分だということを、もっとはっきり分かる例をあげると、ちょっと気がついたのが幽霊である。今さっきもこう申したんですけども、幽霊は有るか無いかというと昔から有るとも言えな無い、無いとも言えない。しかしともかく幽霊は有るのだ、見たと言う人があるのだから。幽霊は有るんだけれども、これがない在がない。有るには有るのだが在るがない。在がないということは足がついてない。これではっきり分かりますね、有と在との関係が。

救いはお慈悲、何のお慈悲かというと、往生するというこれがお慈悲なのである。往生はどこだ、浄土である、在である。極楽浄土へ、念仏には必ず往生がついてくる、すなわち浄土がついてくる。浄土なしについわれわれは救いを考えている。われわれ自身と言ってはわるい、僕は考えている。浄土を忘れている。浄土を忘れていて、ただ救いが有難い有難いと言っている。浄土が出てこないとこの信がなにか落ち着かない。

信は賜った信である、自分の信ではないという。如来から賜った信心である。信仰というのは自分の信仰ではない仏から賜った信仰なのだという意味が、浄土があって初めてはっきり出てくる。信は浄土にある。浄土なしに信を考えると、なるほどこれは僕の信ではないことは分かるが、なんだかその信自身が動いてしようがない、ちょうど信が幽霊みたいになる。

そう思うと僕は何十年間、半ば幽霊として生きてきた

ようである。いよいよもう今日でも明日でも逝かなければならない、これがなんと言いますかねもうドアの外側にある。ドアの外側に浄土があると言いたいのだけれども、もともとそこが本当の部屋なのであって、念仏は入り口なのである、ここは外側なので あって、ここは入り口なのである、我々の世間は外側なので ある。

そういうところで、幽霊的存在でいままでいたのだということになんだか気がついた。気がついてといえばはっきり言い過ぎだけれども、なにかそういう気がつき出したような気がする。

念仏と往生とは一つである。言い換えれば、仏は浄土に有る。

われわれが生きているということは、「生の依るところを以って死の帰するところとする」と。これは金子先生が晩年になってから言われた言葉らしいですね。一番最後にお書きになった『光輪抄』の中にも確かその言葉がありましたね。「死の帰するところを以って生の依るところとする」と。

これで初めてわれわれの信が信になる、これを念仏と言っていいのでしょう。あるいは念仏によって指し示されるところが浄土であると。

「生の依るところ」、「死の帰するところ」の、この「依る」とか「帰する」というのは浄土を抜きにしては考えられない。浄土を知らないときにはいわば幽霊的存在なのでしょう。指し示されるものを知ったときにはじめて、こう歩いて往きながら浄土は生の依るところであり、死の帰するところであるとこう言えるようですね。

その事をこの前にいま一番気にかかっていることと申しました。分かり切ったことなのである、昔からみなそう言ってきたことである。昔から念仏して救われるという。救われるということは何かというと浄土に、浄土に往生することである。

普通いわゆる知識階級と言われる人々は、信仰あるいは救済に関しては地上の救い云々とはいうけれども、往生とはあまり言わないようです。浄土ということは言わない、浄土なしに何か宗教とか信仰が言われる。いやいや宗教というのは、あの世のこと死んでからのことではないと言われる。この世のことなのだから現実に云々などと言われる。言葉はまあいい言葉だ、しかしその現実にというのは幽霊だって幽霊自身に言わせれば、幽霊は俺は現実にいるんだぞと言うかも知れない。

けれども幽霊には先に言いましたように足がないのだ。

足がないということは在がない。幽霊の往く場所がない。事実そういうでしょう、死んだ人は浮かばれないなどと、あの人はこういう事情があって死んでも浮かばれない、死んでも浄土へ往けないなどと。

「浮かばれる、とはどういうことでしょうか。」

そこなんだな、どういう意味にとればいいのかな。本当に死んで沈んでいるという逆は、お浄土に浮かばれるということではないだろうか。本当に極楽往生できるということではないかと思ってきましたが。

これをもさっき申しましたように、地獄というのは一体あるのかないのかという問題なのだが。地獄で一番酷いところを無間地獄という絶え間なく四六時中次から次へと火が出てきて焼いてしまう、いくら焼いてもきりがない。地獄そのものが間断なく地獄なのである。

これは、堕ちてしまったという地獄ではない、こういうことらしい。地獄でも、どんな酷い地獄でも、ここがどん底だと思うとどこか安心できますね。

そういうと少し話がおおげさになるかも知れないが、本当に山形村（昭和三十二年から十一年間教育長を務められた）にいるときも、もう今日はどうともしようがない、万策つきて方法がない。あの山の中を行く道、帰る道、役場から、われ一人とぼとぼと。行くときもそうだ、帰るときもそうなのだ、明日はどうなるのだろう。どうともしようがない。村長も、部落の方も駄目だという。本当に今夜で終わってしまうかという気持で家に帰る。あくる朝、役場に行くのも本当に闇のなかを歩いて行くような気持で行くのだ。皆だめというのである、村長自身もどうともしようがない。つまりどこまで堕ちて行ってもここで堕ち切ったという所がないのが本当の地獄らしいのだ。

どうなるかどうなるか、どうにもならんどうにもならん。どうなるかどうなるかというのがそれが本当の苦しみなのだそうですね。行き着いてしまえばかえって苦しくないのだそうです。

病気でもそうなんでしょう、お医者さんからお前は癌だと言われれば、あるいは癌かもしれないと言われれば、目の先が真っ暗になって、どうなる、どうなるだろうと。しかし、いよいよ手術台に乗ってしまえば、かえって落ち着くらしい。

つまりそこに行き着いてしまえば、地獄必ずしももう

地獄でなくなる。途中の苦しみが、これが人生そのものの苦しみだと、こう言われる。

そういうと苦しみも幽霊みたいなものでしょうかな。あるあると言っても実はそのある正体はない。正体がないのだけれども、その正体がないものにわれわれは四六時中苦しめられている。

明日試験だという前の晩に、今夜学校が焼けてしまえばいいな、それこそ学校に火をつけてやろうかなどと思ったことありませんか。正直のところ、僕はあるね。あるけれども、それでもやっぱりその朝、やむを得ず学校に行って試験場に入ると、これはもう腹が決まるというか、そんな気持は起こらない。その行くまでの間がそれが地獄なのである。

浄土を抜きにして、世間だけで宗教を考えたり、救われるとか救わないとか、信仰があるとか無いとか、この世間だけで論じたのでは、どこまでいってもそれは幽霊の宗教である、幽霊の見方である。幽霊でないということは、つまり足を在につけるということである。

十日ほど前でしたか、『岩手日報』の社説に、児童生徒の近ごろの問題を論じて、「児童生徒に存在感を与えよ」というのがありました。こういう言葉を使っておったので、おっと思ってね。昨日か一昨日も、農協だっか、地方自治体の組合かなんかの問題に「存在感を与えよ」と、これも大きな見出しを書いてありました。世の中全体にやはりそういう存在感に対する不安が出かかっているのではないかな。

つまりこの場合は、児童生徒も、先生も、学校も、それは有る。有るけれども学校自身に在がない。児童生徒は、学校は有るけれども学校嫌いをしている、みなの学校という在がない。だからその中に先生が有ると言ったって、在がないものだから、まるで広場で他人と出 会ったのと同じことだ。出合い頭に足払いを食らわしてやろうと、まるで野原と同じである。生徒同士もそうである。

犬だか、猫だか、狐だか、狸だかわからない。そんなものがぶつかり合えば、有ることは有るけれども、学校という在がない。みんなが幽霊的な存在である。だから児童生徒にいま一番大事なことは、学校という存在感を与えるということ、このように書いてありました。なるほどなと思いましたね。

これは学校の問題ですが、人生そのものの在は浄土である。でも普通世間の人生はこれを考えないで、この有るの方だけで考える。財産がある、名誉がある、地位が

ある、つまり有るの方だけ一所懸命に思っている。この有るの根拠である在がない。こういうことをしみじみ思わせられますね。

今の問題は第二章ですが、「親鸞にをきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」と信ずる、弥陀にたすけられまいらすべしと信ずるというのは、往生するということ、浄土へ往くということ。念仏往生なのである。念仏と往生が離れては駄目なのである。念仏だけで救われると簡単に思うと、幽霊的になる。往生はつまり浄土だ。この「浄土」を必ずつけて読むと、今までの読み方とは少なくとも私自身には、すっかり違ってきたように思うのですが。

『往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑い無く往生するぞ』と思ひとりて申す外には、別の子細候わず。但、三心四修と申す事の候うは、皆」。

これは仏さま、法蔵菩薩ご自身がわれわれに代わってやって下さった。代わってやって下さったという言葉を私も子供のときからお説教で聴いてきた。われわれはとても三心四修はできない、それを代わって法蔵菩薩がご苦労して下さった、むかしのお爺さんお婆さんはご苦労という言葉を使っている。仏さまの心なのだ。そのおかげで、われわれは何もできないのだけれども救われるのだと。

但、三心四修と申す事の候うは、皆、決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思う内に籠り候う也。

南無阿弥陀仏だけではない、南無阿弥陀仏で救われるということは往生するということなのだ。

その内に籠もって、「こもって」というこの言葉の意味はどうでしょうか。現実に毎日われわれはなんらかの意味でこの罪悪深重煩悩具足で朝から晩までいろいろ心の中に悩み事がある、苦しみ事がある。その悩み事苦しみ事がそのまま法蔵菩薩がちゃんと三心四修の中に入れてしまってくれているということである。

われわれの生活内容そのままことごとく三心四修であり、法蔵菩薩のお心の体験の内容となり、あるいは五劫の永遠の修行の中に皆こもってしまっている。その外にあるものはない。どんなに悲しいことでも、どんなに苦しいことでも、どんなに腹の立つことでも、どんなに情

けないことでも、皆それは法蔵菩薩がちゃんと先にもう自分のお心の体験として持ってしまってくれている。死んでしまいたいとか、川にでも飛び込もうかとかなどと思うようなこと、そのことも法蔵菩薩はすべてちゃんとご自身の体験の中に入れてしまってくれている。

それならばいまさら、そのほかの事を持ってして自分のいのちを助けることもないだろう。だからそういう勝手なことをするということは、

二尊のあわれみにはづれ、本願にもれ候うべし。

全部法蔵菩薩の御修行の中に入ってしまっているのであるから、なお自分のものとして、いやこうだああだという外のことは余計なことである。

念仏を信ぜん人は、たとい一代の法を能く能く学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、

なりきってといえば、禅の方のような気がするのだな、ここは「身になして」と柔らかく書いた方がなんだか身体に添うような気がする。

尼入道のむちのともがらに同じくして、ちしゃのふるまいをせずして、只一こうに念仏すべし。

証のために両手を以て印す。

両方の手をついたらしいな。

浄土宗の安心起行、此一紙に至極せり。源空が所存、此の外に全く別義を存せず。滅後の邪義をふせがんが為に、所存を記し畢。

全くこの『一枚起請文』の言葉の意味は、『歎異抄』の

中に書いてあるのと少しも違わないのではないでしょうか。

『一枚起請文』は法然上人が亡くなる二日前に弟子達から何か書いてくれと依頼されたので書かれた。それまで数カ月間弱っていて、少なくとも一週間前ぐらいから何も食べないでおられたらしいのですから、言葉として言う元気もなかったのではないでしょうかね。それでもよくこれを書き与えたものだと思う。これだけちょっと書けないでしょうね。これが本当の史実かどうか、実際歴史的にこういう事実があったのかどうか。あるいは口でぼそぼそと言われたのを、そばで勢観房が筆記したのかどうか。とにかく一種、力強い何とも言えぬものがここにあるような気がしますね。

三、『歎異抄』は物語だから、ただ念仏して善悪をかえりみないという激しく強い内容が出た

今日のとこは『歎異抄聴記』第九講の五「御物語の文章」についてで、曽我先生は『一枚起請文』を引き出して、『歎異抄』の文章との違いを次のように言っておられる。

『一枚起請文』は法然上人のお言葉である。法然上人の生の言葉を受けて親鸞聖人がまた話をされる。そして唯円が自分の耳にしたお言葉を記した。だから消息文のように、初めから書くつもりで書いたのとは違う力があると。

『一枚起請文』はなるほど筆で書いたと言われていますけれども、口でこのように言われたのかも知れませんね。ここには直接に、理屈なしに、端的に「南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思いとりて申す外には、別の子細候はず。」と。『歎異抄』では「信ずるほかに別の子細なきなり」と親鸞聖人は言っておられる。『一枚起請文』の言葉の通りのようですね。

曽我先生が言われるには、『教行信証』は立派な著作なんだけれども、どうもわからんところがあると。しかし『歎異抄』の言葉は、直接求めた人に対して、話し相手に対して物語りされたものの具体性、力強さ、がありどこかわかるところがあるという。そう言われればそんなような気もしますね。

『教行信証』はどうしてもわからないと曽我先生が言われる。われわれが分からないというのとは勿論話はちがいますけど、どこかこう読んでいって一番奥の心の底

にもう一つはっきりしない漠然としたものが残ると。しかし『歎異抄』は理論的な本ではない。なんかこうぐだぐだと言っておるようだけれども、その奥にすっと分かるようなものこちらの心に響くようなものがある、これが御物語の文章の御物語たる所以だと。

同じただ念仏して救われたということだけれども、『教行信証』の一番最後の後序というところに、こういう文章がある。

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。

これはよく言われるように流暢な文章なのだけれども、こういう難しいことを言われたって、一般の人にはちょっと分からないという、それはそうでしょうね。

同じことでもこんなに言われたならば、難しくってとてもついていけないような気がする。それを、「ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」と言われると、ぱっと、心に身体に入るような気がする。　その前に「親鸞にをきては、ただ念仏して」と、「親鸞にをきては」と言われるくらいだから、この言葉はしょっちゅうお弟子さん達にお話ししておられたのだろうと。自分としてはこうだということを、弟子達には常々おっしゃっておられたのだろう。

一向に念仏して、善悪をおそれるなと親鸞聖人がこういうことを言われたのは、『歎異抄』に出ているだけだと。そう曽我先生は言っておられますね。他にはないのだと。なんでもないようだけれども、これは厳しい言葉だな。

われわれは朝から晩まで善いか悪いかと思うだけではなく、人に対しても善悪を責めている。あれはそこが悪いのだ、こっちが善いのだ、あっちが善いのだと。自分についても人についてもそう言う。それだけで毎日毎日暮らしているようなものですが。

ただ念仏して善悪をかえりみないこの内容は『歎異抄』だけだと。何故そういうような思い切った、まるでこの世界全体を一刀両断するような激しい徹底した表現が出るかというと、これは物語だから端的な、鋭い日本刀のような表現ができたのだろう。書いた文章ではそういうものは出ない。文章ではこういう強い表現は出ないのだが、御物語だというそこにこの第二章の強さがある。

ただ一つ断っておくのが、この時常陸から十余カ国の境を越えて来た人たちは、みな「同心の行者」であるということである。同心の行者である、一応御安心を得ている人だということ。

全く門外漢ではないということですね。全然門外漢に、初めて会った人にこんなことを言ったって通用もしないし、またそれじゃ不親切な話になる。同心の行者というのは、宿善開発した人々である。だからまったくもう何の遠慮もなしに、遠慮会釈なく語られる、語っておられる。

もう一つ、曽我先生が取り上げておられる。唯円は『歎異抄』を聖人が亡くなられてから書いておられる。親鸞聖人が生きておられるうちの文章、お手紙、消息類これはある。自分たちもいただいたことがあるから。しかし、御物語はなかった、だからだれも今まで書かなかった親鸞聖人の申された言葉をを書いたのは自分が初めてであるということを唯円自身は知っている。つまりこれ以外に御物語はないと、何としてでもこれだけはちゃんと書いて残さなければならない、そういう確信で書いたのだろうと。そういう力強さがここにはある、それが第二章の物語の強さであろうと。

最後のところは、「念仏は、まことに浄土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、云々」と。こういうのは聖人の理屈ではない、理論的にこう言っておられるのではない。自分自身が生涯念仏の大道を真っすぐに歩いてきた。歩いて現在そこにおられるのである、そのことを言っておられるのですね。

したがって、念仏は極楽浄土に往く因（たね）になるのやら、地獄に堕ちる因になるのかなどは全然問題にならない、理論ではないから。現実に念仏の大道を真っすぐに歩いておられる。だから、念仏を称えたからそれが地獄におつべき業なのか、あるいは極楽に往ける因になるのか、そんな理屈の問題は自分の関知しないことである、全然あずかり知らぬことである。

したがってこの上は、これを信じてとろうがとるまいが、皆さんがたが自分の決断でやることだ。自分自身はこういう大道を真っすぐに歩いている。因になるとかならないとかそんなことは全然頭にないのだ、そういう態度なのだ。だから皆さん方もこの念仏をとるか捨てるかは自分の決断で決めなさい。自分はそんなことには一切関知しない。それが御物語の文章だと。

少しよけいなことだと思いますが、「このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと、云々」というこの言葉はいささかなにか突き放したような感じがしますね。

二十年も常陸の在郷で一緒に同心同行として教えをお互いにあれほど語り合ってきた。今になって一番大事な念仏と往生との関係、念仏が即往生であるということに疑いを持つ。念仏が果たして往生の因になるのか、何か他に別のよい方法があるのではないか、そういう惑いをいまさら出してくる。さてさて頼り気のない弟子達だなあという思いもあって、もうそのような気持ならばもうお前たちは勝手にしろ。少しこう冷淡に突き放したのだというようにとれないこともないというように言っている人もあるようですね。

そこの言葉は曽我先生の言われるように力強さが感じられますね。「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことのおはしまさば、善導の御釈、虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟」こういう強い真っ正面からの態度を出しておいて、「詮ずるところ愚身の信心にをきては、かくのごとし。」と、山のような動かない大きなものをガシンとそこに据えて、「このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと云々」と。

そこで、「なんだけしからんなあ、お前らはそんなら勝手にしろ」という、そのような小さい気持は出ないのではないかと私は思うのですが。

四、あの世という言葉によって、一切諸善万行をこの世に持って来て、この世に浄土という「在」の裏づけをする

この前の続きに戻りますが、第九講の「二、念仏の伝統」、そこには

「機の善悪を宿業にまかせて賢そうな理知的な計らいを捨てて、ただ宿業のままに如来の本願の念仏、南無阿弥陀仏を信ずる。」

とありましたね。ここで宿業という言葉が出てくる。

理知的という言葉も出てくる。現在は理知的な世界である、だから宿業というとどうも理解されにくい。

それにつけても親鸞聖人自身は、「宿業」という言葉を使っておらないそうですね。「業」と言う言葉は使っておられるけれども、宿業という言葉は親鸞聖人が書かれたものにはほとんどないという話だ。よほどものごとを自由に考えられるお方だったのでしょうね。あるいはその当時の運命論的な宿業感、あるいはインド以来の大乗仏教あるいは小乗仏教からずっと来ている因果関係、輪廻の思想、あるいはそういうものから完全に離れ切らないような宿業という民間の考え方をあまり好きではなかったのかな。

現在は非常に理知的な世界である。理知的な世界では先の往生は出てこない。さっき申しましたように、現在の知識階級の宗教観というものは、救済ということ、絶対者の慈悲ということは出てくるけれども、慈悲の具体的な地盤であり、根拠である往生あるいは極楽、つまりあの世ですね、浄土というものが出てこない。理知の世界でなかなか浄土は出てこない。

浄土が出てこないということは、つまり浄土に対する宿業が出てこない。曽我先生から言うならば、宿業は一つの在である。浄土は在である。浄土と宿業の間に挟まって、われわれの存在がある。なにかその ような感じがするのだな。

曽我先生の「宿業は本能なり」と言われる意味を受けとると、宿業はなにか有を裏づけるこの世での在のような感じがする。宿業本能は感応道交するということ、天地万物は感応道交するものと言われている。われわれは宿業というところにいるのだという。

僕らから宿業を除いたら、抽象的な人間になる。僕らがなんとか辛うじて具体性を保っているのは、宿業感つまり本能を持っているからなのだ。「宿業は本能なり」という意味の内容を掘り下げれば、浄土の在に裏づけられているということ。つまり感応道交する本能だから自分ではどうにもできない、そんなような感じがするのです。

宿業に任せてというのはわかりますね。任せるのだから、在でなければ任せることはできない。椅子に座るから、椅子に任せる。船に乗るから船に任せて海に出る。理知的なはからいは有の方だ。頭で船は動かない。船に乗って頭でああだこうだと言ったって船は動かない。けど宿業という船ならば、宿業自身が動いている。ある意味では在の意味がある。この在の宿業を通したのが煩悩

である。
私なら私の煩悩を社会的にあらわせば、罪悪深重、煩悩熾盛。朝から晩までこれなのである。自分として煩悩は熾盛というが、他との関係では罪悪深重でしょうね。
自分だけ悩んだり苦しんだりしているのは、これはまだいい。自分の悩み苦しみがそのまま周囲の人に対する苦しみになっている。自分だけ苦しんでいると思ったら大間違いなのであり、皆周囲の人がその苦しみを何らかの意味で分け持っている。周囲の人に　われわれは罪悪を犯している。意識しないで犯してしまっている。子供が病気をすれば、端的に親は子供以上にに病気になってしまう。金が欲しいと思って盗む。盗むのは自分が銀行から金を持って出るだけだから、人に迷惑をかけないようだがそうじゃない。それによって銀行自身、銀行に金を預けた人、その他警察、周囲に人々に、やたら四方八方に罪悪を犯す。もとは金が欲しいと思うだけのことなのである。ところがそれが同時に、罪悪深重である。
そういうものは皆、有の世界でしょうね。こういうものを裏づける所が宿業である。これに対応するものがいわゆる浄土の在ではないでしょうか。
浄土を建立するというが、浄土をこの世に建立すると すれば、あまり急いではまたおかしなことになる。つまり浄土はどこまでも在なのであって、有ではないのだから。この世を浄土化するというが、うっかりするとこの世に有を更に増すということになってしまったのでは煩悩熾盛、罪悪深重を拡大するだけのことになる。
「浄土というのは死後にあるものでしょうか」
そういう表現を使うしかしようがないのだ。死後にあるという言葉を使うが、いくら死後死後と言ったって、言っているのはこの世で言っている。
そこのところが難しいところだね。浄土を現実化することが、宿業を増すことになったのでは目的が逆になってしまう。宿業をなしにする世界、ない世界が浄土なのである。その宿業の内容である煩悩熾盛、罪悪深重、これのない世界が浄土である。
「そこがよく分からないのですが。死後に解決する、死後に浄土にというのは、何かこう遠い世界のような感じがするのですが。」

理知の世界観ではそうなる、理知だけに止まれば。死後死後と言ったって、言っている今は死後ではないのだか。今は現実なのである。死後という言葉で現実を述べている。だからそれでいいのじゃないかな。

「その有というのと在というのは、英語で言うと有は何と言う単語でしょうか。」

さあ、それはあなたに聞こう。being かな。そうすると在は be かな。

問題は、法蔵菩薩がこの道によって成仏した。そして、この道によって成仏したというが、何によって成仏したかというと、念仏の本願による。

この道によって成仏するとは、念仏の本願である、聖道門的の兆載永劫の自力修行ではない。念仏の伝統のなかに生きたのである、念仏の伝統の中で修行したのである。念仏の伝統の中に生き、修行して仏になったのである。このように考えられる。それより前に無数の仏さまがおられたわけである。だからは四十八願以前に念仏はあった。念仏が先にある。

選択本願の念仏は一切諸善万行の中において、とくに念仏の一行を選んだとこう言われているが、こういうことを言われても僕らには一向ピンとこないわけである。どこがピンと来ないかというと、一切諸善万行ということである。われわれがやっている毎日毎日は、一切諸善万行などを全然何もやっていないわけである。われわれの生活の内容は煩悩熾盛、やることなすこと何らかの意味でみな罪悪深重である。

政府から県に、たいへん大きな補助金がくる、その県からまた各市町村に補助金は分かれてくる。だから村長さんの仕事というのは、県に行って国から来た補助金を自分の村の方へ一円でも多く持って来て、村の中でいろいろと施策するのである。それが村長の腕の見せ所。政治というのはそういうものなのでしょうね。

だから、われわれが村当局の一員であったとするならば、今年はこういうことをやりました、来年はこういう計画です。村のために、村民のために、こういうことをやりました、そういうことだけが出てくる。そういうことだけで毎年毎年ついいい気になっている。

村の開発事業というのが毎年毎年いろいろな形で大きく華やかに出てくるが、そういうプラスがあるだけに、

現実の村の中に入って一軒一軒の家の中を覗いてみると、その陰にどこかにマイナスはあるのである。このことを山形村で私も痛感したのです。

「一将功なりて、万骨枯る」というそう大きなことでなくても、村の施策、いい施策がある限りはどこかの隅々にはその犠牲者があるのですね。そういうことをつくづく思いました。そうすると政治というのはよいことをやっているのか、よいことをやるということを踏み台にして、実際は悪いことをしてしまっているのではないか。村の発展という名のもとに、結局村自身をどこかマイナスの方へ引っ張っていくことになりはせぬか。そのような不安が出てきますね。だからよいことをやっているつもりでさえも、実際はなかなかそうはいかない。

ましてや、朝から晩まで自分のためには何かよいことやろうと思うが、世のため人のために一切の諸善万行をやってきたとは、どうもその言葉を言いたくても言えない。

それならば一体、一切の諸善万行などということは宙に浮いたものか、われわれ庶民全体、衆生全体、とは縁のないことか。何んと言ったらいいものか。

一切の諸善万行の中から特に念仏の一行を選び出したというからには、法蔵菩薩自身は一切諸善万行を実際やったのでしょうね。われわれに代わってやってくれた。われわれはやりたくてもゆめできない。そういうこの世の一切諸善万行をわれわれに代わってやってくれた。これは大きな仕事だと思う。五劫の間思惟したというのは全くそういう事だったのでしょうね。

一切諸善万行をずっと体験してきて、最後にあらためてこの世の衆生を眺めてみると、衆生というものは全然そんなこととは縁がない、自分のことだけに明け暮れている。しかし、その衆生をなんとか成仏させねばならない。衆生においては諸善万行はいくらあったって意味がないのだと言って捨ててしまえば、衆生はまるっきりこれは永遠の地獄になってしまう。一切の諸善万行をなんとかこの世へ持って行きたい。この上の世界へ持って行きたいというかたちにおいて、つまり一切諸善万行をこの世に持って行きたいということは逆に言うと、浄土の在をこの世界に持ってくることだ。つまりこの世に浄土の在の裏付けをすることである。

われわれは諸善万行には一切関係ないことなのだから、一切の諸善万行は死後のことだと言ってもいいでしょうね。なんぼ言われたってこれは縁のないことなのだから。

あの世と言ってもいい、死後と言ってもいい。そういう言葉において一切の諸善万行をこの世へもってきてやりたい。その手ずるは何かというと、それが念仏である。そういうことではないかな、どうだろう。それが法蔵菩薩が念仏の伝統の中に生きたという内容ではないだろうか。

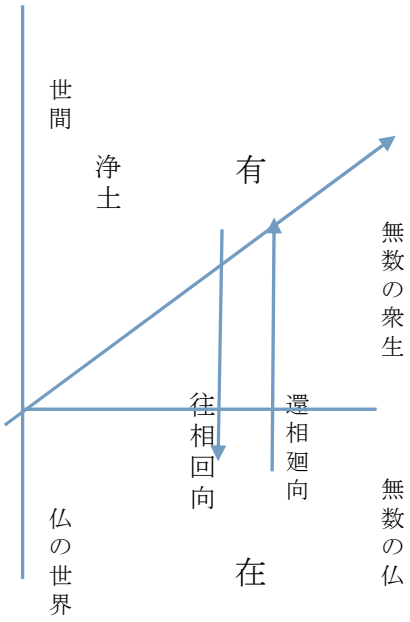
「往生と浄土と言った場合、往生は有に入るのですか。」

有から浄土へ。しかし、これは自分の力ではできない。自分というのは罪悪深重・煩悩熾盛そのままなのだから。だから念仏を与えて、念仏を与えてということは、つまり浄土の在を、念仏を通して在をこの世に持ってくることだ。そこで初めて衆生が救われるということだ。そう言ったらいいな、これで関係がつくようだな。どこかおかしいところがあったら言って下さい。

五、浄土に裏づけられて、宿業感がある、仏の慈悲は宿業である

往相廻向還相回向ともにこれは仏の回向である。われわれは往相回向を先に考えるから、還相廻向は死んでからという問題が起こる。そうではなしに実は還相廻向が先なのだね。還相廻向はこれが法蔵菩薩である。

如来の大慈悲心にふれた法蔵菩薩のお念仏の前のお心の動きを還相廻向と言っている。具体的には還相廻向がが成り立つには、お念仏を称えると。



この下の世界はお念仏の世界だというわけだ、本来。これが念仏の伝統、法蔵菩薩以前から、ずっと永遠の昔

からここはお念仏で一杯であった。しかしこのお念仏をこの上の世界に持ち運ぶということはやっていなかった。法蔵菩薩がここからふるい立って、衆生の罪悪深重煩悩熾盛の身を見るに見かねて、おれがこのお念仏を上の世界へ持ってきてやろうということになったわけですね、思い立ってくれた。

だから曽我先生の表現からすると、それまでは観仏であり漠然とした念仏であった。念仏の伝統はあったのである、下の世界では。この下の世界は念仏で一杯なのである、念仏の世界というのは仏の世界なのだから、無数の仏がここに一杯になっている。下の世界が無数の仏ということは、上の世界が無数の衆生ということでしょう。われわれ無数の衆生に対して、無数の無限の仏がいる。その仏が仏同士お互いに念じているのが念仏である。これが本当の和の世界でしょうね。

その意味では漠然とした念仏であったものを、法蔵菩薩がわれわれのために、特に選んでこっちへ持ってきてくれた。これなのだぞ、この念仏に乗ってこっちに来い。浄土へ来いということは、「浄土へ来い」という言葉で、実は浄土がこちらへ上の世界である世間へ来ることではないのか。

たとえば、親は岩手県にいる、子供は東京にいる。「さあ親のところへ来い」という呼びかけに「ただいま帰りました」ということは、子供のところへ親が行ったことではないかな。

つまり浄土へ往くということは、浄土へ往くという意味でここに浄土が来ている。だから現実の有が有として成り立つ。在が有の裏付けをするから。

「親鸞にをきては、ただ念仏して」というのは、そういう意味だ。一切の諸善万行には関係ない我々は理知的なはからいを捨てる、「来い」という声に「ハイ」と往く。それだけだ。どうして往けるかというと、法蔵菩薩が、自分自身が一切の諸善万行を体験し、またわれわれ衆生の生活内容をそのままことごとく経験し、こんなことは衆生にはまったく縁がないのだと、だから私の念仏をおくってやるから、これでやって来い。そこで初めてわれわれがはからいを捨てて往く、それが念仏である。

「一切諸善万行を捨て、雑行雑修を捨ててということは法蔵菩薩が体験してくれて、われわれはする必要がないというのは、ちょっとですね。この世の中で行われているいろいろな善らしきもの、そういうものを皆捨てて

しまうことなのでしょうか。
例えばですね。先生がこういうように私たちに教えてくださることも、諸善万行の一つみたいに私には感じられる。そういう日常の生き方の問題として、すこしまともに生きてやろうとか、そういうようなことを洗いざらい全部捨ててということが人間にできるものなのかどうか。」

それはできない。第一、捨てると言ったって捨てる場所がない。毎朝廃品を出したとしても、その廃品をどこかに持って行き、どこかにちゃんと置いているでしょう。自分の家からだけは捨てたつもりだけど、東京都も困っているし、北上市も困っているし、盛岡市も困っているのだそうだ。
捨てる所がないから捨てる心配は要らない。捨てなくてもいいと言わないけれども、そんな心配は要らないということ。はからいを捨てるなどと心配は要らない、ということがお念仏である。
そこに「宿業」という言葉が出てくるのだな。僕と貴方との問題が、宿業という言葉が出てくるとちゃんと理屈なしに解るのだよ。僕がやっているのは宿業である。

僕がここに来て話をさせてもらうということも、どんなに人に迷惑をかけているかもしれない。何ひとつ善いことはない。

「宿業でしょうか。還相廻向ではないでしょうか。」

宿業があるから、それに対して還相廻向がある。
宿業という言葉はいい言葉だと思うのだね。親鸞聖人は宿業という言葉を使わなかったのは、あまりにもそれが宿業的なものだから、使うことを忘れていたような気がする。
他の仕事をしないで教師をすることも宿業ですね。泥棒をする、その意味では教師をするのと同じだと言ってもおかしくないね。泥棒をするのもそれは宿業のいたすところだ。
ただし宿業感は運命観ではない。宿業を縁として念仏往生する、だから救われる。
そこではっきりする。われわれの生活が浄土に裏付けられる。それが救いなのである。裏付けを切り捨てるならば、運命観になってしまう。そうではない、宿業感によって救われる。仏の慈悲は宿業を裏付けていることで

ある。

「一切諸善万行を、あるいは自力作善というものを否定しているのではないのですね、松生先生。」

否定するためにはそれがなければならない。否定するためには諸善万行が行われる可能性がなければならない。一切諸善万行はわれわれにはできっこないというのだ。だから否定のしようがない。

「世間でやっている、善いこと悪いことというのがあるでしょう。」

それは世間での話だからね。世間での善悪は道徳である。

下の世界から上の世界を向いたとき、下の世界の修行が諸善になるのだ。上の世界を向いて、下の世界でやっていることを上の世界へ持って行こうと、そういう諸善万行なのだ。

「自力作善も入るのですか。」

自力という以上は勿論下の世界へ入るためのもの。要は簡単にいうと「諸善万行」は宗教語だ。宗教的善なのだ。上の世界での善は道徳の世界。道徳の世界を宗教的に見ると、煩悩熾盛罪悪深重である。

「一切諸善万行というのは宗教的な修行と考えた方がよいのでしょうか。」

宗教的な修行ですよ。

「隣の人にちょっと親切にするというようなことではないわけですね。」

隣の人に大いに親切にしてよろしい、道徳の世界であれば。子供が倒れているのを起こさなければならない。

それを下の世界から見たら、道徳の行いでせざるを得ないのは宿業である。下の世界観で言えば宿業である。

だから宿業というのは宗教的な言葉だ。下の世界をぬきにしたら宿業などはない。あったって運命になる。

宿業だから人を殺していいいって、人を殺すことにな

ったら物騒なことになる。そうではない、下の世界の宗教的な立場から見て人を殺すのも宿業なのだ。

「そうですね、あまり宿業という言葉を使いますとですね、なにかずいぶんこう、あまり解決する前に、何と言いますか、なにもかもストップするような気がしますね。何もかも逃げ道になるような。」

けど、本当に宿業感にたてば、逃げ道どころではない。それが唯一の生きていく道なのだ。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されればそくばくの業をもちける身にてありけるを」と言うのは宿業の自覚である。

ここに宿業そのものがある、これでも救ってもらえるか、なんと言われてもしようがない。この私が救われるということは、宿業感より言えばみんなが救われるということである。

「また元に返ってしまうのですけれども、その宿業という言葉は逃げ道にも使われそうですね。宿業という二字の本当の意味はどういうところにあるのでしょうか。宿業、宿業と私も使っていますけれども、よく分からないですね、そこまでくると。」

辞典なんか見てみると、語源などはある程度説明はしてあるけれどもね。だけどそれを読んでも結局最後の理解はいまのようなところへ落ち着いてこないと理解できないな。

「宿」というのは時間の経過をあらわしているのと違いますか。二日酔いのことを宿酔というでしょう。輪廻関係では前世の因果だということ。前世に酒を飲んだから現世にこうだと。

「業」は身、口、意の三業。われわれが実際に、触ったり、ものを言ったり、思ったりすること。身、口、意の三業があるのが人間、それによって現実の宗教、道徳の世界が成り立っているのですから、一人一人悪口を言ってはならない。それはその通りなのだ。

「宿業が本能であると言った場合、その結びつきはどうなるんでしょう。

宿業は本能であり、山川草木ことごとく感応道交する、

と曽我先生は言われる。

「なにか救おうといいましたね、もっともっと個人がそれぞれ違う要素があり、その人でなければならないというあれが。本能になると、全般的に共通したような、共通の基盤があるような感じがしますね。」

これはまた共通な業を共業（ぐごう）という。そうしなければ社会生活は成り立たない、社会生活を仕事を一緒にして初めてわかる。

以上